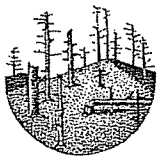
自然との共生

クロマツをめぐる環境民俗学

野本寛一



一、高砂台の思想

年古りた相生の松の樹蔭に尉と姥とが寄り添って立つ。尉は手に熊手を、姥は箒を持っている。――日本人の、人生究極の理像図とも言うべきこの絵がらは、「高砂の図」であり、これを洲浜台にして「高砂台」とも呼ぶ。もとよりこの図は、謡曲『高砂』と深くかかわっている。その概略は次の通りである。肥後の国阿蘇神社の神主友成が上京の途中、高砂の浜で景色を眺めていると、老夫婦がやってきて高砂の松の樹蔭の松葉をかき、浄め始める。そして、高砂の松と住吉の松を相生の松とするいわれや、自分達が松の精であることなどを語って、舟に乗って沖に去る。友成が住吉に着くと明神が現れて神舞を舞う。結婚式の祝儀などにもよく謡われ、高砂の松も、尉・姥も、円満・長寿の象徴として定着している。

ところで、この物語の舞台となった高砂は、兵庫県の加古川右岸河口部、高砂市高砂町の高砂神社だと言われている。高砂の松は、根が一つでありながら雌雄に分かれた相生の古木であったと伝えられ、現在はその五代目の松が守られている。一方、現、高砂神社と対称的な加

古川左岸、加古川市尾上町長田の地に尾上神社があり、ここにも尾上の松と呼ばれる相生の松の古木があったと伝えられ、これも現在は五代目である。現在、加古川河

写真①　高砂の図―高砂神社絵馬

口部は、播磨灘工業地域として埋立てが進み、神戸製鋼・関西熱学・鐘淵化学・武田薬品などの工場がたち並んでいるが、かつては白砂青松の地であった。今でも一帯を歩くと砂地の畑にネギが栽培されており、随所にクロマツの姿が見え、かつての風光の残滓がうかがえる。

天橋立・虹の松原・三保の松原羽衣の松など、日本を代表する松原や伝承の松は海岸部に多い。ではなぜ、日本を代表するクロマツやクロマツの松原が海岸部に多いのであろうか。それは、クロマツが、窒素が少く、保水力の乏しい海浜部の砂地に対して強い適応力を持っているからである。他の植物が適応できない厳しい環境条件の中でクロマツは風雪に耐え、生長して時に古木・大木になる。その一つが高砂の松であり、尾上の松であった。高砂という地名は、砂山や砂丘状地を示すもので、まさに、クロマツ生育地の典型でもあった。『源氏物語』桐壷の巻に、娘に先立たれた桐壷更衣の母が、「命長さの、いとつらう思ひ給へ知らるるに、『松の思はむ』ことだにはづかしう思ひ給へれば……」と述べる部分がある。〰〰の部分は、『古今和歌六帖』第五巻の、「いかでなほ

有りと知らせじ高砂の松の思はむ事も恥づかし」の引き歌表現である。「高砂の松に、あの人は長生きだと思われるのがつらい」と言う意味で、これによれば、当時、

写真②　高砂神社相生の松

既に高砂の松が長寿の象徴として一般化されていたことがわかる。樹木は本来純林を望むものであるがクロマツも例外ではない。クロマツ林は、人が下草刈りや松葉かきを続けることによってはじめて純林が保たれてゆく。農耕生活が定着すると、海からの風や潮を防ぐために防風・防潮林として海浜環境に対して適応力の強いクロマツ林が求められるようになった。ここに、人とクロマツとの共生関係が成立してゆくのであるが、人とクロマツとの共生関係はすでに、さらに身近なところに存在したのである。

海浜部は相対的に山から離れている場合が多い。そうした海浜部で暮らしてゆくに際して、必ず燃料の確保に心をくだく。そんな時、海浜のクロマツは常に貴重な燃料を供給し続けてくれたのであった。高砂市藍屋町に住む角田喜代蔵さん（明治四十二年生まれ）は、高砂町に約三反歩ほどのクロマツ林を持っていた。五〇本ほどのクロマツの林から松葉を採取して燃料にした。この地では、松の落葉のことを「コクバ」と呼ぶ。コクバは火力が強くて便利だった。もとより角田家の燃料は自家のコクバ

だけでまかなえるものではなく、マッチ工場から出る端木を買ったり、他地から売りにくるコクバを買ったりした。現在向島公園となっている地にもクロマツがあったが、ここのコクバの採取は自由だった。角田家のクロマツ林には「松露」も出た。松露は担子菌類の食用キノコで、四月ごろ松林の砂中に出る。それを採取して吸いものに入れて食べた。角田家のクロマツ林は、コクバカキをすることによって純林が保たれ、クロマツ林はまた、燃料としてのコクバや枯枝、食用としての松露を恵んでくれたのだった。ここには人とクロマツの共生関係が成立していたのである。

ここで再び高砂の松に話をもどそう。「高砂の図」は、高砂神社の摂社、尉姥神社の御神像でもある。尉が熊手を持ち、姥が箒を持つ。この姿を、謡曲『高砂』と照合してみよう。「高砂の、所は高砂の、尾の上の松も年古りて、老いの波も寄り来るや、木の下蔭の落葉かく、なるまで命ながらへて。なほいつまでか生きの松……」「高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ」「只今この尉が木陰を清め候ふこそ高砂の松にて候へ」――ここに描かれている様は、松の下を掃き清めることを目的としたものであるという理解を疑う者はないし、それはそれで正しい。しかし、先に紹介した同じ高砂の地の角田家とクロマツ林の関係や、後述する各地の人とクロマツとの民俗事例を踏まえて考えると、尉と姥の行為が、単に老松の樹蔭を清めるにとどまるものでないことは明らかになる。老松が落とす多量のコクバ（松葉）は、尉姥、即ち老夫婦が浦の苫屋の暮らしを支えるに不可欠な竈（かまど）の燃料だったのである。コクバかきは重労働ではなく、老夫婦の仕事としても自然である。種松とも言うべき老松を中心とした海辺のクロマツ林は、人にコクバを与え、それゆえに純林を守ってもらってきたのである。してみると、これまで、長寿・夫婦和合の象徴として継承されてきた高砂の図は、それに加えて、人とクロマツの共生関係をも示すということになる。それは、人と自然の共生を象徴する図柄であり、人は、自然と共生することを前提として、はじめて長寿も、夫婦和合も得られるという深い思想を語っていることになると言えよう。

二、海辺の老松

海浜の、秀でたクロマツと人との共生関係は右にとどまるものではない。阿蘇の神主友成の高砂到着は次のように謡われる。「舟路のどけき春風の、幾日来ぬらん跡末も。いさ白雲の遥ばると、さしも思ひし播磨潟、高砂の浦に着きにけり、高砂の浦に着きにけり。」また、住吉到着は次のようである。「高砂や、この浦舟に帆を上げて、この浦舟に帆を上げて、月もろともに出で潮の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住吉に着きにけり、はや住吉に着きにけり。」――ここで注目すべきは、松の物語において、高砂の松・住吉の松のある地に至るのに、ともに海路、舟路をたどっているという点である。クロマツが海辺に適応する植物であることを思えば当然のことなのであるが、ここには「海からの眼（まな）ざし」がある。舟で海上から陸を望む時、老松・松の大木が舟寄せの指標になるのは当然のことである。古代、加古川河口が優れた船泊であったことは論を待たない。高砂神社の創建が神功皇后寄港伝承を以って語られるのも、船つき場として優れたこの地の立地によるものである。高砂の松も、住吉の松も海からの指標だった。そして、海辺の大木は、漁民たちが、漁場に対する舟位確定を行う際の目標構成要素となった。縦・横各二点を結んだ交点に舟の位置を定めるのであるが、これには多く山が使われるので、この方法を「山当て」「山だめ」などと呼ぶが、目標として海辺の巨木が使われることも多かった。その木は、言わば「当て木」とも言えよう。こうした山が聖山と重なり、木が神木と重なることについては既に述べたことがある。(1)

島根県八束郡美保関の五本松を歌った民謡がある。

へ関の五本松一本切りや四本　あとは切られぬ夫婦松

松江の殿様が美保神社へ参拝する時、行列の槍が一本の松の枝にかかったのでその松を伐らせたのだという。この歌には、殿様の暴挙に対する抗議の気持が込められているとも言われるのであるが、関の五本松は、日本海々上交通の船が美保関港へ入港する際の指標であり、地元漁民の舟位確定のための当て木であった。それゆえに五本松は長く守られてきたのであり、これもまた人とクロ

マツの共生関係と言えよう。「あとは切られぬ」というところに人びとのクロマツに対する守護の気持が込められている。

・尾張に　直に向へる　尾津の崎なる　一つ松　あせを
　一つ松　人にありせば　大刀佩けましを　衣着せまし
　を　一つ松　あせを（『古事記』）
・いざ子ども　早く日本（やまと）へ　大伴の御津の浜松待ち恋ひ
　ぬらむ（『万葉集』六三）

などと歌われた松も船寄せの指標となったクロマツだと言ってよかろう。

折口信夫は、沖縄県八重山地方のアカマタ・クロマタ・マユンガナシ・アンガマなどをヒントとして海の彼方の常世から来臨する「まれびと」を想定し、「翁」の発生を考えた。[2] 高砂の松の樹蔭に立つ尉と姥は、石垣島のアンガマに通じ、それは、海の彼方から人の世を祝福するためにやってきたまれびとが、松の老樹を目標として上陸した姿でもあった。さらに観念化すれば、不可視の神が、クロマツの古木を依り代としてそこに顕現したことにもなる。海辺の老松が海の彼方からやってくる神の依り代になるという信仰論理の基層には、舟人や漁民が、海辺の古木・巨木を、航行・碇泊・舟位確定の指標にするという民俗が生きていたのである。海辺の松の古木が守られてきた理由は、それが、単に燃料としての松葉や松露を恵んでくれるという即物的な面にとどまることなく、深く信仰世界にかかわっていたからである。そこには、人⇄クロマツ⇄神と言った多層の構造が存在したからである。このことは、三保の松原の羽衣の松によって証明できる。[3]

三、クロマツの恵み

以下、人とクロマツの即物的な共生関係を示す事例をあげてみよう。

(1) 静岡県沼津市に千本松原と呼ばれる松原がある。狩野川河口から西にのびる砂州上に広がる松原で、天文六年（一五三七）千本山乗雲寺の増誉上人が防風のためにクロマツの苗を植えたことに始まると言われている。沼津市桃里のクロマツ林もその続きである。桃里に住む鈴木善一郎さん（明治四十五年生まれ）によると、桃里では松林の使用範囲を組単位に分け、境界には石を並べたという。鈴木さんの属していた組の戸数は八戸で、組の範囲がさらに八戸分に分けられ、各戸の境にも石が並べられていたが一戸分の幅は約八間だったそうだ。家々では自家の範囲の松葉をかき、松枝を燃料にした。戦後、県の通達で官林である松林の松葉かきが禁止された。その後プロパンガスが普及したので枯葉も全く使わなくなった。鈴木さんは、松葉かきに入らなくなってから松林が荒れたと語る。

(2) 静岡県浜名郡新居町松山は遠州灘に面したムラで、そこにはその名の通り砂丘の上にクロマツ林がある。高橋利治さん（大正九年生まれ）はクロマツ林の利用について次のように語る。ムラは三〇戸だったので松林を三〇等分して線引きをした。各戸では自家の範囲の松葉を自由にかいて燃料にした。台風の翌日は、朝四時起きをして枯枝拾いに行った。松葉をかいていた頃には松林の砂地が見えていたが、今は松葉をかく者もいないので松林が荒れてしまった。

(3) 静岡県小笠郡大須賀町新井も遠州灘に面したムラで、ムラの前には前田と呼ばれる水田がある。そして、その田の前方に、①新田山　②網小屋山　③四畝割山　④三畝割山　⑤トメスカ　⑥ハマスカ、の六つの砂丘がある。この砂丘はすべて、人びとがソダや簀を立てて砂をため、防風用に作ったもので、砂丘と砂丘の間には畑が拓かれている。⑥のハマスカは渚に連っていてまだ松林が形成されていないが①～⑤はすべてクロマツ林に蔽われている。この地では、「スカ」は砂丘を表わす普通名詞であり、各スカのクロマツは新井の人びとによって植え、育てられたものである。以下は、新井在住の小谷長男さん（大正七年生まれ）による。新井は、東組・中組・前組・池東組・池西組の六組から成っているが、池東組は野賀山という山を背にしているので燃料の心配がない。これに対して、①～⑤の組は山から離れているのでいずれもスカの松の松葉や枯枝を燃料としなければならなかった。しかも、この地では、砂地畑で栽培した甘藷を、冬季、蒸して切干しにすることを生業の一部に加えていたため、大量の燃料を必要としていた。五つのムラ組に対してクロマツ

の生えているスカが五つあったので、一組一つのスカを利用することができたのであるが、公平を期するために①の新田山から⑤のトメスカまでを五つの組が毎年輪番で循環利用することになっていた。組の中でも、スカの松林は、平素は「留め山」になっており、自由に松葉をかくことはできなかった。年三回、日を決めて、各戸一斉に出てゴかきと枯枝おろしをし、公平に分配した。この地では、松葉のことを「ゴ」と呼び、熊手のことを「ゴカキ」と呼ぶのである。こうして集められた松葉や枯枝は日常の炊事や切干しの甘藷蒸しに使われたのであった。このような管理によって、クロマツ林が守られたのである。天竜川が吐出した大量の砂・太平洋の波と風といった自然環境要素に人為的な力を加えて砂丘を作り、そこにクロマツを植えて育てる。そして今度は人がそのクロマツから、防風・防潮、燃料といった恵みを受ける。その燃料は、人為的に造成された砂畑において収穫された甘藷加工に利用される。――ここには、自然環境と人為環境の調和、人とクロマツの共生といった人と自然との美しい交響が見られる。

(4)福岡県糟屋郡新宮町は玄界灘に面した町で、海岸線には美しい砂浜が続き、クロマツ林がある。新宮町町方に住む安河内ヨシノさん（大正三年生まれ）は松原の利用について次のように語る。かつて、新宮町域の松原は海寄りに国有林、内陸側にムラの共有林があった。新宮地域は、さらに、①新宮　②下府　③夜臼　④上府の四つのムラに分かれていたので、松林の利用範囲も四つに分割されていた。その上、安河内さんの住む下府の中が、ⓐ町方　ⓑ先方　ⓒ下方　ⓓ上方の四つに分けられていた。さらにまた、安河内さんの属する町方では、毎年十一月に各戸一斉に松林に赴き、松の木に縄を張って個人範囲を決めて松葉かきを行った。松葉は、提灯松葉と呼ばれる直方体の固まりにして縄をかけ、牛車やリヤカーで家に運んだ。家には二間四方の松葉小屋があり、そこに収納した。一部には、博多の町までリヤカーで売りに行く者もいた。松葉は主として竈で飯を炊くのに用いた。風呂焚きに松葉を使うのは贅沢だとして、風呂の燃料には、台風の時浜に

流れ着いた流木を使った。炊飯時にできた松葉の燠（おき）は火鉢に移して灰をかけて使った。

四月になると松林には松露が出た。松露は海側よりも内陸側に多く出た。松露には、外見が茶色の「麦松露」と、白みの多い「米松露」とがあった。前者は歯ごたえがあり、後者は軟かかった。松露採りは年寄りの仕事で、二〇センチほどの木の柄に八センチほどの鉄の爪が熊手状につけられた道具とハナテゴ（籠）を持って松露採りに出かけたのである。松林の砂がヒビ割れていることでその所在が知れた。食法は、松露飯・松露寿司・吸いものなどが主で、時には焼いて食べることもあった。仲買人もおり、古賀の町には松露の取次店もあった。この他、松林には、キンタケ・ハツタケなどの茸が出たのでこれらも採取した。ムラの共有林については、毎年、役員が出て、松が枯れたり、減ったりしたところに松苗を植えた。

海岸の防風林造成は、自生のクロマツ疎林を核にしながら各地で行われた。島根県出雲地方の屋敷垣である築地松は広く知られるところであるが、その築地松を生み出した要因は、真西の日本海から吹き込んでくる西風を防ぐためのものであった。その西風もかかわって、長く荒蕪地となっていた現、島根県簸川郡大社町荒木地区を開拓したのは大梶七兵衛だった。開拓に先立ち、七兵衛は、寛文年間から延宝年間にかけて湊八通にクロマツの防風林を作った。七兵衛は、海からの風を利用して砂をためるソダ垣方式で人工砂丘を作り、そこに秋グミ・ハギ・チガヤ・ハマムギなど砂地に適した植物を植えて砂丘の砂を固定させた。(4) そして、砂丘が安定したところへクロマツの苗を移植したのだった。この松林も、防風・防潮・燃料供給の面で人びとに恵みを与え、それゆえに松も守られてきたのだった。ここでも、松葉が燃料として利用されなくなってから松林が荒れている。

築地松について先にふれたが、出雲の築地松（クロマツ）も年々姿を消しつつある。築地松が、高い萱葺屋根の棟を隠すほどになるのには、どうしても百年以上はかかる。そして、四年に一度の割で職人を雇って刈り込みをする。平素、築地松の落としてくれる松葉が、山から離れて暮

らす人びとにとって貴重な燃料になることは言うまでもない。ここにも、人とクロマツの共生関係が成り立っていたのである。この美しい築地松が姿を消しつつあるのは次の理由による。①プロパンガスの普及によって燃料としての松葉が不要となった　②アルミサッシの普及によって防風垣が不要になった　③以前の茅葺き屋根が瓦葺きになり、垣の松の松葉が樋につまるようになった。④刈込み職人が減った――環境変化は、実に様々な形で進んでおり、人と自然との共生関係の崩壊も身近な暮らし場面で進んでいるのである。

『杵築浦防風工事旧記』「妙見社山植留之事」には、「慶長三年五月、砂吹上強ク、東御田地のさわり、且は御宮山廻り砂行込甚敷ニ付、西なだ江付而は砂垣ヲ拵初メ、松苗壱万五千本、南神在郷より取寄求之、宮山より見通し高見なた手迄植留致候。」といった記事が見える。出雲の地が古くから強風や、それによる飛砂に悩まされていたことがわかり、また、クロマツが、いかに力強い働きをしてきたかもわかる。『広益国産考』には松毬（まつかさ）から松の実を取って苗を仕立てる方法が詳述されている。かつては、松の実から苗を育て、それを移植して成木になるまで守り育てるという営みが極めて身近なこととして行われていたのであった。

四、歌枕の環境論

1・虹の松原と松浦潟

佐賀県唐津市の松浦川河口から同東松浦郡浜玉町にかけて、幅四〇〇㍍～六〇〇㍍のクロマツ林が約五キロにわたって続いている。松は一〇〇万本以上あると言われ、樹齢一五〇年以上のものも混っている。虹の松原と呼ばれるこの松原は大正十五年に国の名勝に指定された。初代唐津藩主の寺沢志摩守が、防風・防潮のために海岸砂丘にクロマツを植えたのが虹の松原の始まりだと言われているが、それ以前に、「原虹の松原」ともいうべきクロマツの自然林が存在していたことはまちがいない。それは、既に、奈良時代からこの地が「松浦潟」と呼ばれ、後に歌枕として注目され続けていたことによってわかる。「松」の浦と称されるこの地の風光が歌枕となり、それが藩主を動かしてクロマツの植林をせしめたのである。

・遠つ人松浦佐用姫　夫恋に領巾振りしより負へる山の名（『万葉集』八七一）

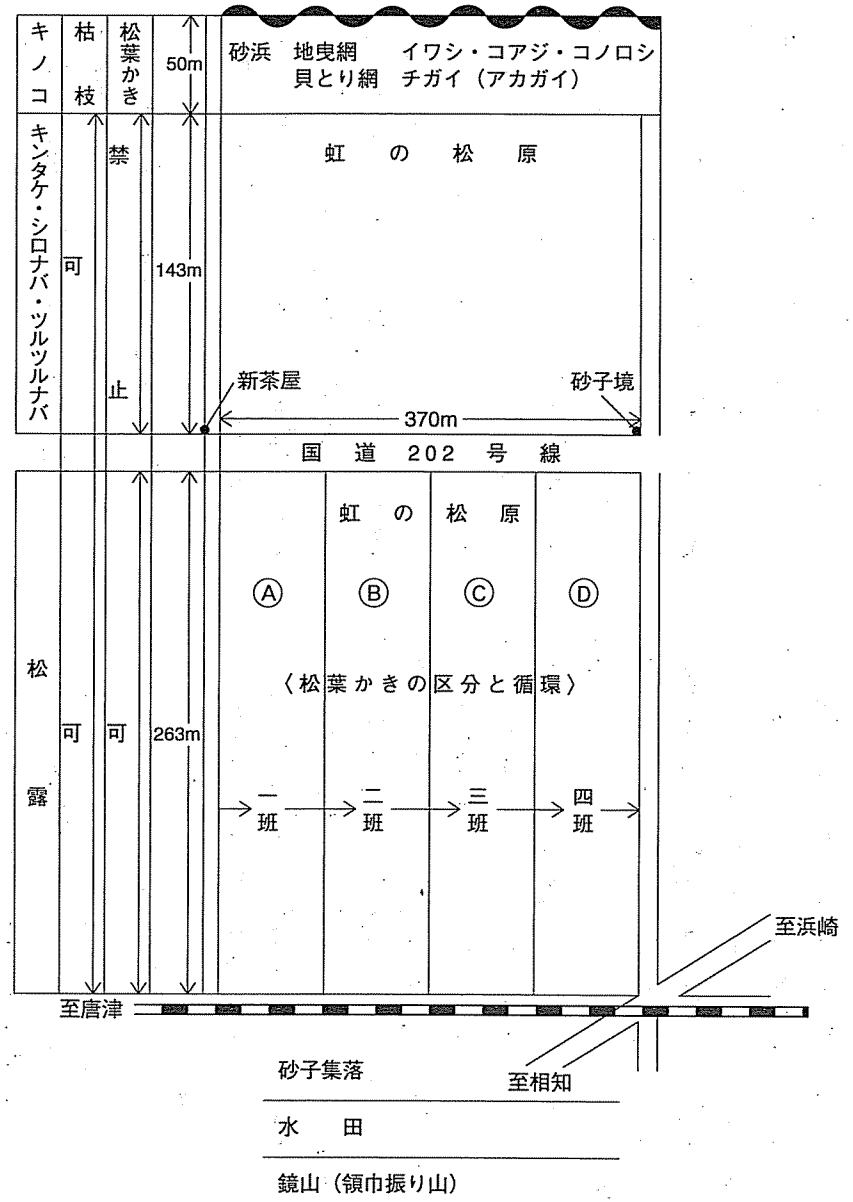
・松浦潟もろこしかけて見渡せば　境は八重の朝霞かも（『後鳥羽院集』）

虹の松原の背後には標高二八三、七㍍の鏡山があるが、この山は松浦佐用姫の伝説とかかわり領巾振山（ひれふりやま）とも呼ばれている。鏡山から虹の松原・唐津湾を俯瞰する眺望はみごとで松浦潟が歌枕として名を馳せたのもこの眺望景観と無関係ではなかった。

名勝・歌枕のクロマツ林と地域の人びととはどのようにかかわってきたのであろうか。虹の松原に接するムラで農業を営んできた、佐賀県東松浦郡浜玉町砂子の堀勇三郎・いそ代さん（ともに大正七年生まれ）の、虹の松原とのかかわりに耳を傾けてみよう。

虹の松原の松葉をかいて燃料にしたのは昭和四十三年までで、その後は禁止になった。第1図は堀さん夫婦が松原を利用していた頃の松原利用概念図である。以下、この図によって話を進めてみよう。砂子地区が松原の利用を許されていた範囲は、西は新茶屋、即ち唐津市境で、そこには、「従是東対州領」と刻まれた標柱がある。東は浜崎境で、国道二〇二号線によって松原が二つに分断されている。戦前から二〇二号線より北の松原の松葉をかいてはいけないことになっていた。その理由は、海に近い位置の松葉をかくと、砂が表面に出て砂が飛ぶからである。砂子地区の人びとが松葉をかいた範囲は、国道二〇二号線と鉄道線路の間で、ここが図のように四等分されていた。砂子地区は四班に分かれていたので、公平を期するため、ⒶⒷⒸⒹの場所に対して班を固定することなく、循環させて利用するようにしていた。松葉かきの期間は十月末から三月までで、松葉かきは月に一度ほどだった。この採取期間に、一か月単位で循環交替したのである。境界は、線にそって、太い松の木にペンキを塗るという形をとった。松葉かきの日は一家から二人ずつ出て松葉をかき、均等に配分した。一人出の家には単位の半分を与えた。松葉は尺五寸に三尺の直方体に固め、縄をかけてリヤカーで運んだ。中には、東唐津の漁師の家へ松葉を売りにゆく者もあった。砂子はこのような分

第１図　虹の松原利用概念図



配方法をとったが、隣の浜崎は自由かきだったという。松の枯枝は、二〇二号線より北のものを拾ってもよかった。

松露には「麦松露」と「米松露」があった。いそ代さんは、小学校に入学する直前、本を買うお金をとるのだと称して母親につれられ松露採りに出かけた思い出がある。麦松露は色が黒くシャキシャキするので自家用にしたが、色が白くてやわらかい米松露は販売用になった。松露は、もとより、松葉をかかない北側の松林には出なかった。松葉をかく範囲で、砂が表に出ているところで採った。松露採りには、「松露かき」と称する木製の道具とハナテゴを持って行った。松露かきは、一寸五分角で、長さ一尺の木に長さ四寸の歯をつけ、二尺五寸の柄をつけたものだった。松露がよく出るのは、雨のあとだった。三月・四月は平素も午前中松露採りにゆくのだが、雨の後にはとくによく採れた。米松露は、ハナテゴの中でゴロゴロさせると赤くなった。赤くなると売れなかった。米松露は仲買人に売り、麦松露は、松露飯にしたり、吸い物に入れたりして食べた。松葉をかかなくなった今、松露は全く出なくなった。

松露の他には、キンタケ・シロナバ・ツルツルナバ・などのナバ（キノコ）が出た。これらは十月で、国道より北の松林に出た。太平洋戦争末期には、松根油をとるために南側の松林の松を伐ったことがあった。

国土地理院一：五〇〇〇〇地図には、虹の松原ぞいの渚に「松浦潟」と記されている。先に記した通り、松浦潟は奈良時代から知られ、歌枕となった地であるにもかかわらず、「潟」の形跡がない。このことについて漠然とした疑問を抱いていたのであったが、堀さん夫婦の話を聞いているうちに古代の松浦潟がイメージとして湧き出てきた。虹の松原と鏡山の間は三〇〇㍍～五〇〇㍍と極めて狭く、その中央に、東西に流れるムタ川と呼ばれる川がある。「ムタ川には太かタニシがいた。ムタ川は昔松浦川だったそうだ。」と勇三郎さんは語る。この地には、「砂子三軒高島五軒」という口誦がある。高島とは唐津港内に浮かぶ島で、浜からも鏡山からもそのすばらしい姿が望める。この口誦は、砂子に、かつては民家が少なかったことを意味している。また、この地には「拓

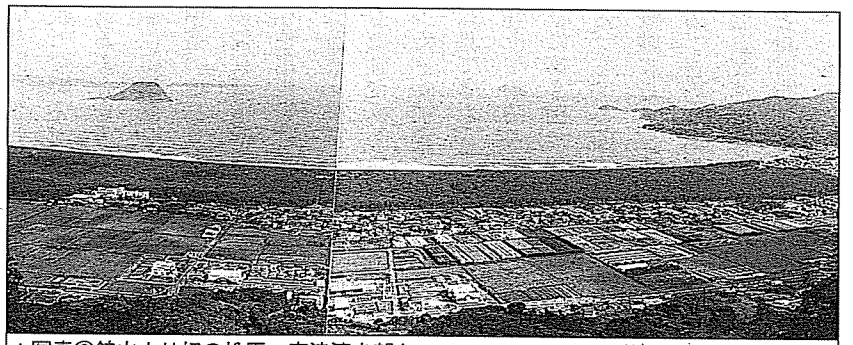
きどり」という言葉もある。開拓した田はそのまま拓いた人の所有になるという意味である。「コッテ新開」と呼ばれる地もある。コッテ牛ごたる男の力ではじめて開拓できた新開地という意味だという。ムタ川は、今では整備されているが、かつては湿田の中央の深い沼川だった。砂子周辺の田は湿田だった。この地では湿田のことをドブ田という。ドブ田で稲を栽培するには苦労が多かった。湿田のため牛で代かきができないので「鍬代」と称して、人が鍬を使って代かきをしなければならなかった。また、「畝田」と言って、田の中に畝を立てて、そこに苗を植えなければならない程だった。稲刈も、刈った稲を一旦稲の上にのせなければならない程だったという。そして、「砂子の人は嫁を持たっさらんじゃろうか。」という軽口がたたかれた。砂子の男は、深田・湿田で働くのでいつもふんどしに泥がついていたというのである。隣部落の「干居」という地名は、舟が干あがったことによると言い伝えられている。「ひっぱる」は、「干墾」で、湿田を干して開墾したという意である。勇三郎さんの時代にも湿田の田床を固めるために山から土を運んだことがあった。「自分の田を一寸高くすると隣の田が水になる」と語ったものだという。

右に紹介した堀夫妻の体験的伝承によれば、虹の松原と鏡山の間を流れるムタ川付近は甚しい湿田で近代以降もその農業に困難を極めたことがわかる。そして、何よりも、ムタ川は昔松浦川だったという伝承は重要である。唐津湾に向かって弓なりに続く砂浜と虹の松原、その右端に注いでいるのが玉島川と横田川で、左端に流入しているのが半田川を合した松浦川である。古くは、この玉島川の流れが左に、松浦川の流れが右に乱流し、虹の松原と鏡山の間は湿地、即ち潟をなしていたのである。こうした視点で一帯を眺めてみると、かつての「潟」を彷彿させる地名が散在しているのに気づく。浜崎側には、「大江」「土井」「岡口」などがあり、唐津側には、「和多田」「大土井」などがある。「和多」は、川の湾曲部を意味し、「和多田」は、その湾曲部を残存させる形で土手を作り、土手と湾曲部の間を水田にしたものである。「大土井」は、その経過を物語る「大土手」の意である。

松浦川河口部、舞鶴橋のある部分は極端に川幅が狭く、

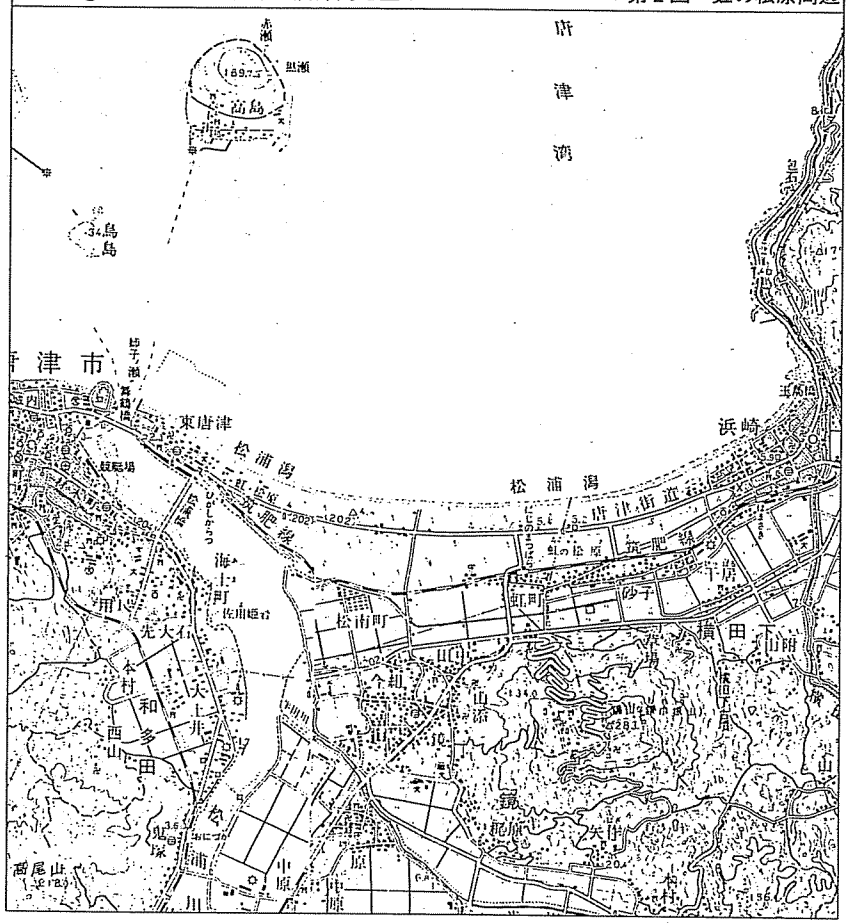
ここは、河口部で川幅が広がるという河川一般の地形に反している。しかも、右岸が虹の松原を形成する砂州であることを考えると、この河口が降雨出水の折しばしば、「河口閉塞」を起こしていたことはまちがいない。河口閉塞の度に松浦川の流れはムタ川ぞいに鏡山と虹の松原の間に流入を重ねていたのである。松浦川左岸海士町に「佐用姫岩」と呼ばれる巨石がある。一連の佐用姫伝説にかかわるものなのであるが、この巨石の周辺は現在でも湿地である。『万葉集』に登場して、歌枕の基点となった「松浦潟」は、唐津湾に面した海岸線ではなく、右に見てきたように、虹の松原と鏡山の間で、現在美田と化している部分だったのである。それは、叙上の考察並びに第2図・写真③などによって実感できるところである。してみると、古代の虹の松原は、現在の天の橋立の景観に近く、帯の状態をなす砂州だったことが推察される。当時の松原は現在の虹の松原に比べて疎林であったとしても、隔離されている故に乱されることなく、人びとは、折にふれ、舟で松原に赴き、松葉などを採取していたものと考えられる。

歌枕としての松浦潟は、松浦佐用姫伝説に負うところも大きい。先に紹介した『万葉集』八七一番歌において、山上憶良は松浦佐用姫とのかかわりで領巾振山を歌っている。百済救済のため渡海する夫狭手彦との別れを惜しんで鏡山の頂で領巾を振ったところから鏡山が領巾振山または領巾振峯と呼ばれたとされている。厖大な佐用姫伝説を紹介・分析する余裕はないが、「領巾振」「袖振」が、招魂・風招ぎ等の呪術であることは一般に説かれるところである。[5] 問題は、それがなぜ鏡山で行われたかということである。それは、鏡山がその名を得るに至った一要因と思われる霊池がこの山の山頂にあることとかかわりがある。雨乞い・豊饒予祝等にかかわる祭りの場としては絶好の地なのである。今一つは、山頂からの眺望である。眼下に虹の松原（古代には、潟と松原）、そして白い渚の線、唐津港に浮かぶ高島、そして彼方に広がる海と空――、この山の頂は「君を待つ松浦の浦のをとめらは　常世の国の海人をとめかも」（『万葉集』八六五）と万葉歌に歌われた常世から、豊饒をもたらす神霊を招ぎ寄せる呪術祭祀を行う場にふさわしい地だったのであ



▲写真③鏡山より虹の松原・唐津湾を望む

▼第2図・虹の松原周辺



国土地理院　1：50000×81%

る。神を島づたいに迎える信仰は各地に見られるのだが、高島は、常世の神が依り着かれ、中休みをする島といった印象が強い。そして、代表的な松浦佐用姫伝説として、夫狭手彦の渡海に際して領巾を振ったとするものがあるのだが、これは、単に別れを惜しむといったものではなく、その呪的行為の中に、領巾や袖を振って航海の安全を祈るということがあったと考えられる。さらに言うならば、領巾や袖を振ることによって、海の波風を鎮める呪法があったと考えるのである。「渡海と領巾振り」が、鏡山を舞台として伝承された背後にはこうした信仰原理があったはずである。それは、海・船のよく見える場所で行うことによって効力が倍加したのである。

歌枕の発生原点は、造化の妙ともいうべき、自然景観・地形環境である。そこに信仰が発生・定着し、やがて、そこに伝承・文学がまつわる。文学や伝承が、さらに人と文学を呼んで観光地と化してゆく。これまでは、そうした過程の中で、おのずから景観保全・環境保全が保たれてきたのであった。歌枕となった優れた風光の中に身を置くことによって、人は感動し、時に自己回復を得てきたのであった。ここに、広義における自然と人との共生を見ることができるはずである。

2・天橋立とその周辺

京都府宮津市に天の橋立がある。それは、宮津湾と阿蘇海を遮る形で、江尻から文珠にむかって突出する砂嘴であり、全長三六三五メートル、幅は四〇メートルから一一〇メートルである。約六〇〇〇本のクロマツ林に蔽われた景観はみごとで、文珠・成相の両山腹から股のぞきされる。特別名勝に指定され、古来、歌枕の地としても知られている。中でも、小式部内侍の、「大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」（『金葉集』五五〇）は名高い。

日本三景の一つに数えられる天の橋立も、かつては地元の人びとの暮らしの場であり、そこには、クロマツ林と人びとの共生関係が成り立っていた。宮津市文珠の川崎悦子さん（大正二年生まれ）は、天の橋立とのかかわりを次のように語る。文珠の人びとは、橋立の、阿蘇海側を内海（うちうみ）、宮津湾側を外海（そとうみ）と呼ぶ。五月末、麦刈りを終えると、麦を舟に積んで橋立の外海の砂浜に運んだ。現在文珠は三〇〇戸ほどもあるが、戦前は五〇戸内外で、麦

栽培をする農家が二〇戸ほどあった。農家はみな舟をもっており、文珠の瀬戸を渡って麦運びをしたのである。砂浜にムシロを広げ、その上で、カラ竿を使って麦を叩

写真④　天橋立

いたのだった。この作業のことを「麦カチ」というのであるが、麦カチをすると体が痒くなるのでたびたび海へ入って体を洗ったものだという。橋立まで麦を運んで麦カチをした理由は、浜の利用と、水浴びだったという。文珠の人びとの松葉かきは全く自由で、範囲などは決められていなかったが、大体、秋、雪の降る前にフゴと熊手を持って橋立に赴いて松葉かきをし、小屋に収納しておくという形をとった。

天の橋立を歩いてみると、砂浜は外海側にあり内海側には砂浜がない。クロマツ林の中に、ツバキ・ヒサカキ・ヤマモモなどが見られるのであるが、これらの木々は内海側に多い。松露は内海側には出ず、外海側に出た。松露の出る四、五月には籠を持って松露採りに出かけた。他に秋になるとイクジという黄色いキノコが出たのでこれも採取し、吸いものに入れた。松露とは反対に、ハマナスの実は内海側になった。子供のころ、夏、赤いハマナスの実を潮水につけて食べたことがある。ヤマモモの実も採って食べた。松の中に混在する椿の木が実をつけた。その椿の実を拾って油を搾ったりもした。こうして、

人びとは、常時、橋立のクロマツ林に入ったのであるが、みだりに松を伐ることはなく、松葉かきなどで林床を整えることになり、それがクロマツ林の保全に役立ってきた。

文珠の氏神は吉野神社で、祭日は十月八日である。この日、午前九時、ムラびと達は神輿船の供をして橋立に舟で渡る。そして、橋立明神での祭りを終え、再び舟を使ってムラへ帰り、各戸を巡回する。今でも、祭りの日は、舟で橋立へ渡らなければならないと伝えている。橋立の文珠寄りに真水の湧出する「磯清水」があり、海神を祭る橋立明神がある。前述の通り、文珠の人びとは、暮らしの中で橋立と深くかかわってきたのであるが、吉野神社神輿の船渡御や、祭日に舟で橋立てに渡ることを不文律とする点などから、古来、橋立を聖視してきたことが窺える。

天橋立にかかわる伝説の一つに次の話がある。天上にあった伊邪那岐命が、地上の、籠宮におられた伊邪那美命のもとへ通うために天から長い梯子を掛けられた。その梯子が一夜のうちに倒れたのが天橋立だというのである。この伝説は、天橋立を成す砂嘴の付け根に鎮座する籠神社の存在にかかわるものである。この伝説は、天橋立が、籠神社に鎮まるべき神のお通りになる「神の道」であったことを暗示している。また、当社の社名「籠神社」の由来は、祭神彦火火出見尊が、竹で編んだ籠舟で海神の宮へ赴かれたことによると伝えられている。海彼世界即ち常世と交流・往復する神が、常世への往復に通る道が天橋立であり、この伝承からも、天橋立が「神の道」と解されていたことを窺うことができる。天橋立の北側に籠神社があり、それに対応する形で、南に文珠を祭る天橋山智恩寺がある。両端に信仰の拠点を持ち、天橋立は汚穢を許されなかった。長く「神の道」として守られたクロマツ林は、後に「元伊勢」と呼ばれる籠神社への参道ともなったのであるが、これもまた聖域への道であり、汚してよかろうはずはない。こうした経過の中で、天橋立は、近代以降、行政的にも保護されるに至ったのである。天の橋立も、造化の妙→信仰拠点→歌枕→観光地、といった展開をたどってきたのである。「観光地」というと、商業主義と喧騒の象徴とされる現今であるが、

画一化・類型化されたツアーを離れてみれば、自然はたしかな反応を示してくれる。鏡山から虹の松原を俯瞰し、展望台から天橋立の股のぞきをしただけでは、クロマツは何も語ってはくれない。その、おのおののみごとな眺望に心を洗い、併せて、クロマツ林に参入し、砂を踏みしめ、松籟の中におのれを置いてみて初めて、クロマツとの交流ができる。信仰と文学と、長い間の土地の人びとの営み、それに行政の手助けなどが時の流れの中で集積されて歌枕の自然が守られてきた。この、時間と空間の交点におのれを置く時、人はクロマツにやさしくなり、クロマツもまた人にさらなるやさしさを示してくれることであろう。

注

（1）拙論「仏教受容の基層民俗――生業形態からの視角――」（大系仏教と日本人9・宮家準編『民俗と儀礼』春秋社・一九八六）・拙論「山当てと信仰」（『静岡県史・資料編23・民俗一』静岡県・一九八九）など。

（2）折口信夫「翁の発生」一九二八（『折口信夫全集』第二巻・中央公論社・一九五五）。

（3）拙論「御穂神社」（谷川健一編『日本の神々・神社と聖地10・東海』白水社・一九八六）。

（4）高瀬川開削三百年記念事業実行委員会『大梶七兵衛』（大社町荒木公民館・一九八九）。

（5）山中耕作「松浦佐用姫」（『日本伝奇伝説大事典』の解説・角川書店・一九八六）・辰巳和弘「領巾振り」（『埴輪と絵画の古代学』白水社・一九八四）など。

（のもと かんいち・近畿大学助教授）